

選者 川口孤舟

投句・選句 今井紀久男 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 熊谷くにお 後藤とみ子 小早健介

在間千恵 佐藤ただしげ 高橋康敏 田島正己 土谷堂哉 豊田ゆたか 西澤國護

長谷見びん 福島正明 古田昇 古川百合子 星田啓子 宮内規雄 山崎亜也

山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄

選句のみ 伊賀山そらお、梅崎くすを 重枝孝岳 庄司龍平 高橋清子 橋口隆 早川允章

山本三恵

【互選句】 ◎は孤舟選者の選 選者欄の○は選者の「天」

十三点 ◎林檎剥く真紅のリボン解くやうに 昇 (孤・忠・く・健・○千・○孝・清・○堂・
國・び・百・亜・盛)

九点 かまきりの祈りは永し日は沈む びん (紀・○くす・五・龍・己・堂・隆・啓・三)
薄野や胸に銀波の打ち寄する 啓子 (○そ・紀・○健・と・龍・び・允・規・
三)

杖を手に遠きポストへ秋日和 盛雄 (そ・紀・龍・己・ゆ・○正・百・規・
三)

七点 蓮の実の飛んで神泉しづもれり くに お (紀・五・康・昇・○啓・け・三)
◎野分にも負けるな能登の蒼き海 けい子 (紀・健・た・孤・ゆ・び・昇)

六点 広角のレンズに余る大花野 孤舟 (くす・と・千・清・國・昇)
◎草の実の勲章付けて吾子帰還 正己 (紀・孤・く・た・清・け)
棟梁の声一直線秋日和 堂哉 (く・千・清・規・百・け)
現われし地霊の使者や曼殊沙華 びん (紀・五・孝・清・堂・盛)

五点 筆箱にどんぐり独楽と肥後の守 康敏 (紀・と・百・啓・天)
友は皆儚く消えて秋の暮 規雄 (紀・忠・た・允・百)

四点 秋晴れや地下鉄四ツ谷の赤電車 忠彦 (くす・正・啓・亜)
篝火に揺るる泥眼月の能 孤舟 (紀・堂・○己・康)
駅前に甚句流るる秋祭 五郎太 (そ・紀・隆・天)
◎星月夜隣の人に話しかけ 全 (紀・孤・孝・正)
全 (國・百・規・天)
菊日和骨董市に人多し 全 (紀・健・堂・ゆ)
停車するたびに草の香秩父線 全 (紀・健・堂・ゆ)
とみ子 (國・允・正・規)
金木犀香り始める家路かな 千恵 (國・允・正・規)

◎秋澄むやウエアは派手に皇居ラン
備前路は黄金の筵稲穂咲く
止め梔は輪島塗なり秋の宿
◎鉄骨を打込む音や港秋
翔平に球場狭し天高し
秋の雲風に流るるわが一生
木曾谷の竜胆の青鮮やかに
伽羅薫る春日大社の菊の宴
◎木犀や年に一度の自己主張

千恵 (紀・孤・龍・天)
ただしげ (紀・くす・健・ゆ)
ゆたか (紀・くす・と・盛)
びん (そ・孤・く・亜)
全 (紀・忠・五・け)
百合子 (そ・び・隆・允)
けい子 (紀・隆・規・天)
全 (と・康・正・昇)
亜也 (くす・孤・び・け)

三点 ◎金木犀までリハビリ散歩距離のばす
初鴨の池畔のモンローウオークかな
眼福の天目椀や秋の星
この鄙にコンビニの灯や秋の暮
牧広しサイロの空に小鳥湧く
秋空に応援校歌風に乗る
誕生日孫のおねだり栗ご飯
鳥渡るマトリョーシカを家苞に
アールデコ尽くせる邸秋晴るる

紀久男 (孤・隆・盛)
孤舟 (紀・堂・昇)
千恵 (紀・清・三)
堂哉 (ゆ・亜・〇三)
康敏 (そ・紀・〇く)
國護 (紀・た・己)
全 (紀・忠・隆)
昇 (紀・五・亜)
亜也 (千・〇龍・己)

二点 星飛ぶやトランプの札撒くごとく
小望月波に消えゆく砂の文字
親友の身にしむ話酒を酌む
秋刀魚喰ふ天気予報は大荒れに
「コーリングユウ」の歌声秋の夜
俊寛を暫し話題に十三夜
見逃せり銀河の旅人ほうき星
半纏をびしつと決める子青蜜柑
聖堂に論語の素読木の実降る
うつぶんを空に晴らすや夕紅葉
庭の栗お隣招きおこわ飯
夜の窓を叩くは木槿残り花
草藪に黒き星散る吾亦紅
一蝶は俳諧の味秋の雲
雲母摺の装幀撫づる鏡花の忌
◎秋の海流れる砂の音を聞く
闇深く天河神社星流れ
虫しぐれ口遊ぶ能登の童歌

孤舟 (龍・啓)
全 (康・允)
忠彦 (紀・び)
くにお (紀・忠)
五郎太 (康・け)
全 (紀・健)
健介 (〇と・正)
千恵 (紀・盛)
康敏 (く・〇允)
ゆたか (千・孝)
國護 (紀・千)
啓子 (孝・〇盛)
全 (紀・五)
亜也 (紀・ゆ)
全 (紀・昇)
けい子 (孤・啓)
盛雄 (紀・康)
全 (〇紀・た)

一点 残暑きつりハビリ励む老(おい)同志
(通院と訪問リハビリ週各2回) 紀久男 (忠)
一頭だけ公園で舞う秋の蝶 忠彦 (天)

芋煮会鍋を載せてる石爆る（はぜる） 忠彦（紀）
 釜寺で一葉出会えた初紅葉 全（紀）
 秋気満つ五十回忌の懐古談 とみ子（紀）
 夕やけに映る鏡絵父母ヶ浜 ただしげ（紀）
 中秋の月煌々と孫はしやぎ 全（國）
 月替わり窓からの風秋を知る 全（國）
 黄昏てとんぼみたいにふあふあり 正己（孝）
 新蕎麦を打ちし友あり七回忌 堂哉（紀）
 秋晴れや出湯の子らの笑い声 ゆたか（己）
 白樺に残る葉少し秋深む 國護（た）
 秋霖や今日も降り継ぐ能登の悲歌 びん（紀）
 軽飛行機打ち上げ火花の上を飛び 正明（紀）
 秋の夜半闇をおよいで水底へ 百合子（垂）
 蹲に秋草ざつくり盛る茶店 啓子（紀）
 金木犀強く香ほり来月半ば 全（龍）
 芋煮会友に招かれ吟行す 天牛（紀）
 ◎不足なき世に生き不足とはそぞろ寒 盛雄（孤）

【句評・短評】

十三点

林檎剥く真紅のリボン解くやうに

昇

孤舟選者・・・長く切れずに剥けた皮は、まさに解いたリボンのよう。

千恵さん・・・剥かれてゆく林檎から赤い皮がずんずん垂れ下がってゆく様子が目に浮かびます。剥き切れたらちよつとかつこいいい！

孝岳さん・・・林檎の皮を途切れなく上手に剥くのは難しいこと。その皮を真紅のリボンにたとえて見事な絵になっている。「解くように」が視覚に訴えて妙。

堂哉さん・・・何とも意外で綺麗な形容ですね！特選！

百合子さん・・・この句ではじめて気が付きましたが、ほんとうにこの通りですね。

亜也さん・・・色が踊る愉しい動画。

九点

かまきりの祈りは永し日は沈む

びん

五郎太さん・・・長い鎌のような手を折る姿勢を祈りと見たところがお手柄。

堂哉さん・・・中七に感心しました。成る程祈りのポーズですね！

隆さん・・・最近、垣根の刈込みをした。刈込後に綺麗な薄緑の蟪螂がでてきた。殺さなくて良かった。助かった。

啓子さん・・・誰もが知る前肢で祈る恰好・・・この中七の表現に感服です。

薄野や胸に銀波の打ち寄する

啓子

健介さん・・・薄野に立って気高く気宇壮大な気分になられたとは！かくありたいものです。

とみ子さん・・・仙石原でしょうか。光景が、よくわかります。

杖を手に遠きポストへ秋日和

盛雄

ゆたかさん・・・杖をつきながら歩むことは大変です。

正明さん・・・今まではポストまで走っても行けた。それが今ではとても遠くに感じられ、

杖を手にして郵便を出しに行かざるを得ない。足が弱っているのです。哀愁がある句ですね。

百合子さん・・大事な方への便りはやはり手書きの手紙、ポストにポトンと落としてほっとする。思いが伝わって来ました。

七点

蓮の実の飛んで神泉しづもれり

くにお

五郎太さん・・夏の早朝に花が音をたてて開くのを昔見に行きましたが、実が飛ぶのは晩秋の昼の盛りか夕方でしょうか。

康敏さん・・静かな神域の池で蓮の黒い実が跳ね飛んで水に落ちた。そして再び静けさが。啓子さん・・静謐な景。この一瞬に浄土のような空気が感じられます。

野分にも負けるな能登の蒼き海

けい子

孤舟選者・・地震と水害のダブルパンチ。能登への応援歌。ただしげさん・・気持ちのこもった能登の応援歌になっている。

ゆたかさん・・能登は地震による被害よりも大雨による被害が大きく大雨に負けるなという励まし。の思いが感じられます。

六点

広角のレンズに余る大花野

孤舟

とみ子さん・・花野の大きさを上手に表現されたと思います。

千恵さん・・広角レンズにも収まり切れない大花野！ テレビなどで見かける映像が目には浮かびました。一度観てみたい！

草の実の勲章付けて吾子帰還

正己

孤舟選者・・オリンピックの金メダルのつもり。得意げな吾子。

一方、「吾子」の表現について、俳句ではまず自分のこととしないで詠うほうが望ましいとされています。

ただしげさん・・邪気の無い子供の気持ちを上手く表現している。

棟梁の声一直線秋日和

堂哉

千恵さん・・頑固そうな棟梁の声が澄んだ秋空に響いている。ふと口元が緩みそう。

百合子さん・・棟梁の声ってなぜあんなによく通るのでしょうか。まさに一直線という感じがす。

現われし地霊の使者や曼殊沙華

びん

五郎太さん・・ヒョロヒョロと現れ、怪しげな形と血を思わす色。想像の素晴らしさに点を入れました。

堂哉さん・・中七に参りました、稀有な比喻ですね。

五点

筆箱にどんぐり独楽と肥後の守

康敏

とみ子さん・・ひと昔前の小学生の男の子のセルロイドの筆箱の中ですね。懐かしい。

百合子さん・・懐かしい昭和の筆箱。いくつもいくつもとどんぐり独楽を作りました。肥後の守って今の若者は知らないでしょうね。

天牛さん・・決して若い人のものでなく、老人の筆箱です。昔使ったどんぐり独楽と肥後の守、懐かしいですね。

友は皆儚く消えて秋の暮

規雄

ただしげさん・・老いの寂しさを上手く表現している。

百合子さん・・多くの友が此岸から彼岸に渡ってゆきました。歳月が経つほどに煙のように消

四点

えてゆきました。

秋晴れや地下鉄四ツ谷の赤電車

忠彦

啓子さん・・・きつと誰もが好きな駅。秋晴れに車両の赤を配してスカツとした気分！
亜也さん・・・地上に出て赤が映える。

篝火に揺るる泥眼月の能

孤舟

堂哉さん・・・雰囲気が巧く出ていますね。

正己さん・・・篝火、嫉妬する女の執念。くわばらくわばら。

康敏さん・・・月の夜の薪能、目に金泥を塗った女面が篝火に妖しく照らし出された。

駅前に甚句流るる秋祭

五郎太

隆さん・・・相撲甚句の伸びやかな唄は秋祭りにあう。

天牛さん・・・如何にも江戸風の半纏がズラリと並んだ様子がよくわかります。

星月夜隣の人に話しかけ

五郎太

孤舟選者・・・「奥さん！滅多に見られない素晴らしい星空ですね」

菊日和骨董市に人多し

五郎太

百合子さん・・・もう長いこと行っていないませんが、川崎大師の骨董市の情景が甦って来ました。今も変わりはないのでしょうか・・・

天牛さん・・・秋の青空の下、骨董市の人の賑わいがよくわかります。

停車するたびに草の香秩父線

とみ子

堂哉さん・・・あれこれと沿線を想像しています。一度乗ってみたいです。

ゆたかさん・・・のどかな田舎の風景が目には浮かびます。

秋澄むやウエアは派手に皇居ラン

千恵

孤舟選者・・・派手なウエアに身を包むシニア・ランナー。若い者には負けられない。

天牛さん・・・ウエアが、いかにも若々しい感じがでています。

備前路は黄金の筵稻穂咲く

ただしげ

ゆたかさん・・・広々とした田園の実りの秋の情景が目には浮かびます。

止め梔は輪島塗なり秋の宿

ゆたか

とみ子さん・・・輪島塗工房の復興早かれと願います。

盛雄さん・・・災害の重なる能登への想いが句の中に凝縮された佳句。

鉄骨を打込む音や港秋

びん

孤舟選者・・・秋の澄んだ空気を震わせて工事の音が届く。

くにおさん・・・「港秋」が窮屈な感じがします。例えば「秋の湾」とか「秋の江または秋の

江に」などでは。

亜也さん・・・港だからこそ、秋だからこそその乾いた音の拡がり。

翔平に球場狭し天高し

びん

五郎太さん・・・大ホームランをすつきりと詠まれました。

秋の雲風に流るるわが一生

百合子

隆さん・・・自我が生まれた人間も所詮は白骨となる。

木曾谷の竜胆の青鮮やかに

けい子

隆さん・・・高緯度の植物は鮮やか。「木曾谷の竜胆鮮やか優るなし」でも。

天牛さん・・・木曾谷で竜胆の青が効いて来ますね。

伽羅薫る春日大社の菊の宴

けい子

とみ子さん・・・奥ゆかしくも豪華な菊の宴ですね。

康敏さん・・・奈良春日大社で十月九日に行われた重陽節供祭は、菊の節供とも呼ばれ、献香の儀が行われた。

木犀や年に一度の自己主張

亜也

孤舟選者・・・普段はおとなしく親の言うことを良くきく子が、今日に限って反抗・・・。

二点

金木犀までリハビリ散歩距離のばす

紀久男

孤舟選者・・・何かの目標やご褒美があるとやる気が出るもの。

隆さん・・・目標を定めた散歩で治癒への気力が漲る。「金木犀まではリハビリ励む人」でも。盛雄さん・・・行先の目標がないリハビリ散歩より金木犀の香りが愉しめるのは良いこと。

歩数が延びたでしょう。

初鳴の池畔のモンローウオークかな

孤舟

堂哉さん・・・懐かしい！モンローウオーク

昇さん・・・鴨のモンローウオークは元祖よりキニートですね。

眼福の天目椀や秋の星

千恵

紀久男・・・文句なしの好句。下五がぴったり。私の中で、特選の「天・地・人」のうち「地」

この鄙にコンビニの灯や秋の暮

堂哉

ゆたかさん・・・コンビニは地方の田舎にも店舗を開いています。私もひさびさに里に帰りコンビニの開店に驚きました。

亜也さん・・・過疎化の進む里の夕暮、そこはかかない心細さを和ませる灯。

三恵さん・・・山あいのそこそ鄙びた田舎道に全く不釣り合いな人工的「灯」が目に入った時の違和感。共感しました。しかし、より惹きつけられたのは、この光景が「里」でも「郷」でもなく「村」でもなく、「鄙」という言葉とどうか漢字をあてはめられたいところです。まさしく【ザ・俳句】です。

秋空に応援校歌風に乗る

國護

ただしげさん・・・春の運動会が増えた昨今、秋の運動会は懐かしく楽しく、秋らしい。

牧広しサイロの空に小鳥湧く

康敏

くにおさん・・・北海道の広々とした牧場が想像できます。その牧場のサイロの空に小鳥が群れ鳴いている。雄大な景と小鳥の取合せがうまく融合している。

鳥渡るマトリョーシカを家苞に

昇

五郎太さん・・・昔の思い出でしょうか。このところロシアは魅力がなくなりました。

亜也さん・・・シベリアから越冬に飛来する鳥達自身が持つてくる姿まで連想。

誕生日孫のおねだり栗ご飯

國護

隆さん・・・「孫」俳句は情に流れ易い。「誕生日大好物の栗おこわ」でも。

私の田舎では、唐芋（薩摩芋のこと）の乱切りを入れて炊くこともある。秋の香りのするご飯で楽しい。子供でなくても笑顔になる。

アールデコ尽くせる邸秋晴るる

亜也

千恵さん・・・朝香宮邸内の様子でしょうか？あの時代に夫婦でパリに居住されてたんですよ。その審美眼もさすがですね。

龍平さん・・・Nouveau から Deco へ。秋に入りデコの多様な装飾様式の本領が発揮されている

二点

小望月波に消えゆく砂の文字

孤舟

康敏さん・・・砂の上に書いた文字が波に消されて行く描写はパット・ブーンの「砂に書かれ

たラブレター」を始め沢山あるが、季語の小望月が秀逸。

「コーリングユウ」の歌声秋の夜

五郎太

康敏さん・・・映画『バグダッド・カフェ』で全編に流れるジョヴェッタ・ステイルが唄う

「コーリングユウ」、サビの音量豊かな「I am calling you!」が耳に蘇って来た。何時までも続く気だるい残暑を吹き飛ばして呉れる。

俊寛を暫し話題に十三夜

五郎太

紀久男・・・一枚目の菊之助が岳父の吉右衛門の当たり役に挑戦。芸風に合わないが好評のようです。

見逃せり銀河の旅人ほうき星

健介

とみ子さん・・・十三夜の頃から西の空に彗星が見えるはずでしたがー。私も見逃しました。

壮大な景の拡がり、良いと思います

半纏をびしつと決める子青蜜柑

千恵

盛雄さん・・・大きなお祭りでしょう。中七のびしつと決める子”が頼もしい。小学生かな。

聖堂に論語の素読木の実降る

康敏

允章さん・・・現役時代会社（丸紅）の近くだったこともあり湯島の聖堂を散歩したことを懐かしく想い出しました。

庭の栗お隣招きおこわ飯

國護

紀久男・・・辛口の旨い地酒持っていきますので私もお招きに預かりたいものです。

闇深く天河神社星流れ

けい子

康敏さん・・・今秋は多くの流星群が現れた。闇に包まれた奈良の天河大弁財天社で見たのはオリオン座流星群であろうか。最も活発だった。

夜の窓を叩くは木槿残り花

啓子

盛雄さん・・・味のある秀句。「天」にいただきました。

草藪に黒き星散る吾亦紅

啓子

五郎太さん・・・あちこちに点々と見える吾亦紅の花、秋も開けてきました。この季節の茶花ですが、英語名はバーネットburnetというようです。赤黒い独特の色からか学名はサンギソルバ（血を吸うの意）、バラ科だそうです。

一蝶は俳諧の味秋の雲

亜也

ゆたかさん・・・乱れ飛ぶ蝶でなく一蝶としたことに味があります。

秋の海流れる砂の音を聞く

けい子

孤舟選者・・・砂が流れる音が聞き取れるのも、静かで澄んだ秋ならでのこと。

虫しぐれ口遊ぶ能登の童歌

盛雄

ただしげさん・・・能登の悲しみを童歌（下句）に託している。

紀久男・・・胸にジンとくる句です。低い声で口遊まれたのでしょうか。上五の季語が特に効いております。特選「天」にいただきました。

一点

一頭だけ公園で舞う秋の蝶

忠彦

天牛さん・・・虫好きの私としては俳句で一頭なんて言葉を使はれると、つい採ってしまいます。

釜寺で一葉出会えた初紅葉

忠彦

紀久男・・・聞いたことの無い寺ですが、今年はじめて一葉のみの紅葉を見た感激を詠っておられます。

白樺に残る葉少し秋深む

國護

ただしげさん・寒々とした秋らしい感じがよい。

秋の夜半闇をおよいで水底へ

百合子

亜也さん・・・その先に一条の光明あれかし。

蹲に秋草ざつくり盛る茶店

啓子

紀久男・・・文句のつけようがない見事な作品。私の中で特選の「天・地・人」の内「人」

金木犀強く香ほり来月半ば

啓子

龍平さん・・・先日我が家前の急な坂を五分歩いて降りたら金木犀がタワワに咲いていると女房が言うので共に鑑賞。満足して別の楽な坂道を帰って来たら家から一分の所に同じようにタワワに咲いていた。これって無駄足と言うべきではなからん。

不足なき世に生き不足とはそぞろ寒

盛雄

孤舟選者・・・人によって満足度は異なるもの。隣の芝生は青く見える。



【次回十一月及び 十二月（納会）青葉会予定】

☆十一月二十八日（木） 午後一時から 三軒茶屋・世田谷区施設「しゃれなあと」

（昭和信金三軒茶屋支店ビル）4階 部屋名：シリウス

○（）出句・ご投句締切日 十一月二十四日（日）午前中 メール・FAX、郵送にて星田まで。

当季雑詠 句会ご参加者は五句、ご投句の方は二句を目処としてお出してください。

☆十二月十九日（第二木曜日）午後一時から 句会 於：三軒茶屋・「しゃれなあと」

（昭和信金三軒茶屋支店ビル）4階 部屋名：シリウス

☆午後五時から 忘年会 於：銀座アスター三軒茶屋賓館

※年末となりますので、十二月句会は第三木曜日を予定致します。

ご出句締め切りは 十二月十五日（日）です。ご出席の方は5句、ご投句の方は2句を目処としてお出してください。

※句会終了後、恒例により青葉会忘年会を開催致します。句会場の並びでより駅に近い、銀座アスター三軒茶屋賓館で催行致します。句会に参加されずとも、日頃は選句だけの方でもご都合許せば是非ともご参加下さい！大歓迎です！ご出席いただける方は十二月のご出句締切日の十五日までに、星田まで、忘年会ご参加の旨ご連絡下さいますようお願い申し上げます。



【青葉会報】

一、 十月句会は、日頃句会にはお仕事や遠隔地のためなかなかご参加出来ない、山崎亜也さん

と、名古屋から 山田けい子さんがご参加されました。日頃以上に皆さまからも、披講の場での注意事項や句に係る経験談など活発なお話、ご意見が交わされ、賑やかな句会となりました。流石に天候も遅れ馳せ乍ら、秋らしさが見え始めた頃の作句でしたので、金木犀や菊、秋の空、昆虫など秋の季語が用いられ、一気に秋の深まりをみせた句が八十七句集まりました。結果はご覧のように、十三点に昇さん、次は九点で、びんさん、啓子さん、盛雄さんが続きました。

十一月も半ばになると気温もぐつと冬に近づいてくるとの予想、十一月の句会は皆さまからのご出句では季節の変化の様子もまた楽しい句会となろうかと存じます。

一、 孤舟選者近詠

釣瓶落し一畝ごとに暮れ残り

流星や心の中に穴ひとつ

篝火の揺れ爽籟の野外能

仔馬生れマリオネットのごとく立つ

笑はせてほろりとさせて村芝居

二、 関係者 近詠

若き日の老いし日の聖句花柘榴

聖日を閉ぢんと牧師水を撒く

癌ともに生命体や大昼寝

薔薇の庭ウッドチップをふはと踏む

アルマイトのコップ伏せある里清水

白玉におかめの笑顔ふと浮かむ

狐穴塞ぎし祠稻荷寿司

鱧天の白身ほつくり春木町

踊らせて炒めて光る茄子の黒

風の来て極上の蔭夏櫛

眞希子

鼠火花あの頃の夢どこに行つた

陽亮

全

父の齢に追ひつく今年青林檎

全

全

あのひとは十も年下濃あぢさい

全

弘子

便便と生きてこの仕儀根無草

全

脳梗塞を患いて二句

全

炎昼やグーチョキパーを無意識に

全

全

千里馬でありし海馬やいま海月

全

全

今日の大谷三振ばかり枇杷の種

全

全

「森の座

十月号」

横澤放川

選（日経俳壇選者）

令和六年十一月吉日

(了)